

佳作

私だけの上映会

福島県 中村衣里

私が7歳の夏、大好きなアニメが映画化されたが、私の街では上映されなかった。父は私をかわいそうに思って、最終上映日の日曜日に隣の県の映画館に連れていってくれた。

ワクワクしながら並んで待っていると、係員が来て、「今回の上映はここまでで、満席になります。後の方はご覧になれません。」と私達の少し前で行った。私は何が起きたのかわからず、びっくりして家族と顔を見合わせた。

待っていた人達は係員に「立ち見はできませんか」「子どもだけでも」「補助椅子などは」と真剣にお願いしていた。しかし、係員は困った顔で「申しわけありません。次が最後の上映です。」と繰り返すだけだった。私はもうその映画を観ることはできないと思って、悲しくなり大きな声で泣き出してしまった。

その時まで、ずっと黙っていた父が、「この映画は家から100キロも離れたこの映画館でしか上映していません。早朝に出発して、高速道路を使って、みんなで楽しみにして来たのに残念です。」と静かな声で言った。すると、近くにいたお姉さんも「もっと遠くから、この映画を観たくて、バイクで来ました。なんとかならないですか。泣いている人もいますよ。」と言ってくれた。しかし、係員は、事務所に戻ってしまった。私達はどうすることもできず、帰り始めた人々を、ただ、ぼんやりと眺めていた。

帰ろうとした時、係員が出てきて言った。「もう1回だけ、特別に上映します。整理券をもらって、2時間後に来て下さい。」拍手と歓声があがり、あたりは急ににぎやかになった。私はうれしくて、うれしくて、跳びあがって家族と喜び合った。

不思議とあんなにうれしかったのにストーリーは覚えていない。ただ自分の希望が壊されず実現する喜びは、待ち時間に食べたパイナップルのシャーベットのおいしさとともにあざやかに、忘れられない。映画館の皆様、あのときは本当にありがとうございました。